

はじめに

みなさんは、「田島弥平」という名前を聞いたことがあるでしょうか。

彼は、明治時代に現在の群馬県伊勢崎市に生まれ、「清涼育」と呼ばれる養蚕の技法を確立したとして有名な人です。弥平の生んだ素晴らしい養蚕の技法は、現在までも受け継がれ、日本の産業の発展に大きく貢献しました。

そんな弥平の家は今でも、伊勢崎市の境島村に「田島弥平旧宅」という名前の世界遺産として残っています。

弥平の家は、父の弥兵衛が興した蚕種商売をしている裕福な家でした。

文政五年、弥平が生まれた年に近くを流れる利根川が大洪水を起こしました。しかし、弥兵衛をはじめとする島村の人々はその災害に負けることなくその川原を開墾して、新たな桑畑を拓きました。その桑畑を使い、弥兵衛は蚕種製造業と呼ばれる、生糸を作る蚕を育てる産業で成功したのです。

「弥平、見てみる」

父・弥兵衛に呼ばれて弥平が、蚕を育てる茅葺き蚕室に来てみれば、そこでは白い綺麗な蚕が一生懸命に桑の葉を食む音が聞こえてきます。

「これが、お蚕さまだ」

「お蚕さま？」

そうだ、と言うように弥兵衛は大きく頷きます。

「お蚕さまは、わしらに恵与えてくれる。お蚕さまがいなかったら、わしらは生きていけん」
「だから、とっさまはお蚕さまを呼び捨てにしないん？」

弥平は籠を覗き込みます。そんな弥平の頭を、弥兵衛は大きく撫でました。

「とっさまはな、お蚕さまを育てたり、お蚕さまの卵を売る商人なんだ」

「卵？」

蚕の卵というのは、小さく黒く、扱いが難しいのです。

「ほら、前に見せたことあったろう、紙についてたあれのことだ」

蚕の卵——蚕種は糊で紙につけられて保存されます。その紙（蚕卵紙）を弥兵衛は弥平に見せたことがあったのでした。

「あの黒い粒からお蚕さまが生まれて、糸を作ってくれて、綺麗な着物ができるんだ。こんな小さな生き物が、わしらの生活を支えてくれてる」

養蚕業で成功した弥兵衛は、学問にも精通しており、それを受け継いだ弥平もまた学業熱心な子供でした。

「だから利根川の洪水がなんだとは言ってはおれん。わしらには強い根性がある。これを忘れちゃいかん」

いいな、と言う弥兵衛に弥平は頷きました。弥平が生まれた年、文政五年の大洪水の年、弥兵衛たちは本当に苦労したのです。十年経った今、弥兵衛が成功したのはその苦労と村のみんなの努力があったからでした。

「わかった、忘れん」

そのとき誓った弥平の根性が発揮されたのはその五年後——弥平が十五歳になった年のことでした。

「弥平！」

切羽詰まった声に、弥平は叩き起こされました。

「あ……？」

「弥平、起きろ！」

夜中でした。弥兵衛が弥平の顔を覗き込んで、激しい形相で弥平の体をゆすっているのです。

「とっさま、」

「弥平、火事だ！ 蚕室の茅葺きが燃えてんだ！」

その一言で弥平は飛び起きました。家の外が明るく光っていました。

「村のもん集まってっけど間に合わん、お前も来い！」

弥平と弥兵衛は外へ走り出しました。

「蚕室が……」

あたりが真昼のようでした。小さいころ、弥兵衛が蚕を見せてくれた蚕室が燃えているのです。

「とっさま、これ……」

十五歳の弥平は何もできず、ただ呆然と立っているだけでした。目の前で灰になる、父の蚕室をただ眺めているだけでした。

「こりゃあ、無理だ」

村民の一人が呟きました。

「無理じゃねえ！」

弥兵衛はその言葉を遮るように叫びます。

「なんでこんな……」

絞り出すように出した弥平の声は、ただ空気の中に溶けるだけで――

「弥兵衛さん、もうこれは駄目だい。家に燃え移らんかっただけでもよかったんじゃねえか」

村の人々の言葉に、弥兵衛は肩を落とすしかありませんでした。

――その後、鎮火はしたものの蚕室の茅葺きは消失し、ただ木材の焼け跡だけが残りしました。

「弥平」

弥兵衛は十五歳の息子に語り掛けました。

「諦めちゃいかん。一からやり直す」

「また建てるん？」

「建てる」

島村は昔から、利根川の氾濫に苦しめられてきました。困難を幾度も乗り越えた島村の人々の心には、諦めないという根性が強く残っているのです。そして、その心は弥平にも受け継がれていました。

「俺もやる」

「弥平？」

弥平は拳を強く握りしめました。瞳の中には痛々しい姿の蚕室が映っていました。

「俺も、とっさまとお蚕さま育てるから」

「いいのか」

弥兵衛は弥平の肩を抱いて、以前より幾分か大きくなった頭を撫でました。

「俺も諦めん」

その日こそが、弥平が養蚕に従事することを決めた運命的な日でした。諦めないという強い気持ちとともに、弥平は父・弥兵衛と共に養蚕業、蚕種製造業へと乗り出していったのです。

「弥平、今からうちの養蚕について教えるから、覚えてくれ」

「うん」

弥兵衛は夜遅く、弥平とともに図面を広げていました。

「うちは今まで、自然育って育て方でお蚕さまを育ててきた」

「自然育？」

弥平は訊き返します。

自然育というのは、蚕室の中を自然のままの温度で満たす育て方です。暖房器具などを使わずに窓からの通風だけで温度を管理するのです。

「そう……—でな、」

弥兵衛は紙の中の、次に再建する蚕室の図面を指差しました。

「今は温暖育が主流だから、今度は温暖育で行こうと思ってる」

「……温暖育」

温暖育とは火の力を使って蚕室を温める生育法のことです。自然育よりも早い日数で蚕種を作ることができました。

「温暖育でやってみねえか？」

図面を指先で軽く叩きながら、弥兵衛は弥平の顔を覗き込みます。

「俺も、温暖育でやる価値はあると思う」

「よしわかった、温暖育でいこう」

弥兵衛と弥平はそう決意し、蚕室を再建、温暖育を始めたのですが——

「……うまくいかん」

なぜか温暖育がうまくいかないのです。大事な蚕がどんどん病気になって数を減らしていきました。

「どうしてうまくいかんのか」

弥兵衛は自問しますが、答えは出ないまま年月だけが過ぎていきます。

「とっさま」

二人並んで、再建した蚕室を眺めています。弥平が重い口を開きました。

「このままじゃ、いかんと思う」

「……そうだなあ」

あのとつさま、と弥平は空を仰ぎました。真つ青で綺麗な空が、頭上に広がっています。

「養蚕してる家は島村の他にもっとある。どうだい、一回いろんなところ周って見て来たら、なにかわかるんじゃないかな」

「そうだなあ」

弥兵衛も弥平と同じように空を見ました。諦めない、という精神がその胸には宿っているのです。

「とつさま、俺も行くから一緒に行かんか？ お蚕さまが大事なんはとつさまが教えてくれたことだい。このままじゃ、お蚕さまが島村からいなくなっちゃうに」

かくして弥兵衛と弥平親子は蚕の生育法を研究するために、さまざまな地域を渡り歩きました。

そうするうちに、養蚕が盛んな奥州へ渡った時、米沢（今の山形県）にあった養蚕農家を二人は訪れることになりました。

その米沢の養蚕農家の蚕室は、ところどころ壁が破れていたり穴が空いたりして風が吹き抜けていました。そんな、風がよく通る場所で育てられた蚕は、無事に繭を作っていたのです。これは自然の風で

蚕を育てる自然育によく似ていました。

弥兵衛と弥平は驚きました。

「蚕を育てるには風が大事なんだ……！」

驚き感心すると同時に、弥平は思いました。

（確かに風を通すことで成功はしている。だけどまだ改良の余地は十分にある……俺はそれを見つけてみせる）

村に帰った弥平と弥兵衛は、さっそく温暖育をやめ、風を大事にする育て方に切り替えました。

安政三年（一八五六年）、研究に研究を重ね、改良に改良を重ね、弥平は家の敷地にあつた納屋を改造し、二階建ての蚕室としました。それはいわゆる、「清涼育」の先駆けとなるものでした。その屋根に換気のための窓（やぐら）を据え付けたのです。

そしてやぐらをつけたことで、今までうまくいかなかったことが嘘のように、弥平の新しい自然育である清涼育は成功したのでした。清涼育は自然の風を上手く利用して蚕を育てる方法でした。飼育日数は温暖育より長くなるものの、失敗する確率は温暖育より圧倒的に少なくなりました。

こうしてうまくいったことから、弥平は納屋の三階部分を増築し、吹き抜けの構造にしました。加えて自身の家の二階部分を蚕室として作り変え、屋上部分の端から端にやぐらを載せました。これが今でも残る、田島弥平旧宅です。この二つの建物は、完成した文久三年（一八六三年）に、弥平によって桑柘園（そうしやえん）と命名されました。

この文久三年が、弥平による清涼育の確立の年だと位置づけられています。

——翌年、蚕種の輸出の規制が無くなり、養蚕を行う農家たちが増えました。そうした農家の人たちはみんな、弥平の考えた清涼育を採用しました。

「蚕室はやぐらを備えることが大事でな、絶えず空気を循環させるのを忘れちゃなんねえんだで」

弥平はそんな農家の人たちには分かりやすく生育法を教え、弥平のおかげで清涼育は「島村式蚕室」と呼ばれるまでに有名になりました。

弥平は蚕種家の中でも、中心人物のような存在になっていき、弥平の教えを乞うためにやってくる学生も多くなりました。

元治元年（一八六四年）には、外国への蚕種の輸出が許され、島村でも蚕種製造業に携わる農家が増えました。またこの頃、ヨーロッパで蚕の病気が流行ってしまい、蚕が不足していました。そのため、弥平たちは病気にかかっていない日本の蚕をヨーロッパに輸出することに尽力しました。

4

時は流れて明治時代。長く政治を動かしていた幕府は無くなり、代わりに明治政府がたちました。ヨーロッパでの蚕の病気が収まったこともあり、江戸時代から続いていた急激な蚕種の輸出増加は落ち着きつつありました。

この頃、天皇が住まう宮中で養蚕が始まり、弥平はそのリーダーとして「世話方」を務めました。その宮中の養蚕では、弥平が開発した島村式蚕室の構造が採用されました。

そんなある日、

「田島さん、大変です」

明治政府の大蔵省からの遣いがある日、弥平の元へ訪れました。なんでも、外国に輸出するための日本の生糸や蚕種に問題が見つかり、外国の信頼が低下してしまつたというのです。

「今後、このようなことがないようにきちんと規制を設けたいのですが田島さんの意見をお聞きしたい」
弥平は頷きました。

「わかりました、ぜひ協力させてください」

大蔵省は、弥平の他にも各県の代表的な蚕種家を「蚕種大総代」に任命し、規制を行うことにしました。代表は各県一人とされていましたが、弥平は仲間の武平とともに蚕種大総代となりました。

「規制の文書は田島さんに任せたいのです。考案していただけませんか」

弥平は規制の文書を考案し、それは大蔵省に採用されました。

——しかし、この時、蚕種大総代は新たに政府にできた内務省の下に入っていました。

「申し訳ありません、田島さん」

内務省からの知らせに弥平は尋ねました。

「どうしたのですか」

「田島さんが考案してくださった規制に、諸外国が反発しているんです」
内務省は、規制に対する諸外国の反発を考慮し、規制緩和の方向に動いていました。弥平は秘密会議を開き、これからの規制について話し合い、新たに事項を決めました。これもまた諸外国の圧力により機能しませんでした。結局、蚕種大総代は廃止となってしまいました。

5

そんな、蚕種大総代の騒ぎの少し前、明治七年（一八七四年）。このころ、貿易の中心地であった横浜に日本各地からの大量の蚕種が持ち込まれていました。それをヨーロッパの商人に売り込んでいた横浜の商人は、蚕種が多くなり値段が安くなってしまうのを恐れ、大量の蚕種を廃棄していました。

「捨ててはいけない。日本の、島村の蚕種はヨーロッパよりも絶対に質がいい。数が多くても安くなるわけではない」

弥平はそう思い、島村の蚕種家に言いました。

「横浜から蚕種を輸出するのではなく、島村からヨーロッパへ直接輸出するんだ。俺たちは俺たちの大事な蚕種を捨てちゃなんねえ」

しかし、弥平や島村の農家それぞれが一人で活動してもヨーロッパの商人たちが見向きするはずありません。

そこで弥平は、一つの組織を作ることを考えました。弥平たち島村の農家たちだけではなく、蚕業を営む農家たちの会社を作ったのです。これは日本初の蚕業会社であり、「島村勸業会社」と名付けられました。

島村勸業会社では、会社に参加する農家の蚕種の品質を規制によって統一しつつ、「島村」というブランドで蚕種の販売を行う、というものでした。弥平はこの会社を使って、ヨーロッパでの蚕種の販売経路を確保していったのです。

——そして……

「田島さん」

ある日、島村勸業会社に渋沢栄一が来ていました。令和六年度から日本の新しい一万円札の肖像となる渋沢栄一は、日本の企業を多く設立した人で、島村勸業会社の設立にも協力していました。

「ヨーロッパのイタリアに直接販売してみたらどうですか」

「……なるほど、イタリアですか」

栄一の提案に弥平は頷きました。イタリアはこの頃、他のヨーロッパ諸国と同じように、蚕の病気に悩まされていたのです。

栄一は後日、三井物産という会社に協力を頼み、弥平たち島村勸業会社はイタリアでの蚕種の直売をするために明治十二年（一八七九年）、ヨーロッパに向けて出港しました。

アメリカのサンフランシスコ、ニューヨーク、イギリスのリヴァプール、フランスのパリを辿って、

明治十三年（一八八〇年）にイタリアのミラノで直接販売を達成することができました。もちろん、蚕種が売れない日もありましたが、弥平たちは自分たちの蚕種に自信を持っており、決して安売りするとはありませんでした。そうして、蚕が不足していたイタリアで、弥平たちはわずか三ヶ月の間に、持ってきた五万枚の蚕卵紙のほとんどを売りつくしました。

また、弥平はイタリアの素晴らしい機械技術に触れました。日本とは違い、イタリアの蚕から糸を取る機械はすべて鉄でできており、驚いた弥平はそれらを熱心に見ていきました。

こうして一回目のイタリアでの直輸出は成功しました。
——ところが……

「田島さん、話が違うんに」

二回目のイタリア直売を果たした弥平のもとに、島村勸業会社に元々参加していた比較的小規模の農家の人たちが集まっていました。

「イタリアで売るよりも横浜で蚕種を売るほうが儲かるってのはどういうことなんだい」

実はイタリアでの直販売は、一回目は上手くいったものの、二回目は売れ行きが怪しくなってしまうのです。これは、ヨーロッパで蚕の病気がなくなりつつあり、イタリアが自分の国でつくった蚕種で間に合うようになったからです。

「イタリアで売れば横浜より儲かるってあんたは言ったんだ。でも違った」

弥平は拳を握りしめます。

「俺たち島村の人間には、どんなことがあっても諦めないって根性があるんじゃないやなかつたのか」
弥平は必死で言いました。

「うちの蚕種は質がいいんだ。売れないはずがない」

ですが結局、三井物産の協力による第三回のイタリアでの直売でも、あまり利益を生むことはできませんでした。

「田島さん、俺たちは抜けさせてもらおう」

再び弥平の元を訪れた農家たちの言葉に、弥平は驚かざるを得ませんでした。

「抜けるって、勸業会社を？」

「わりいんねえ。だけでもう、無理だろうなあ」

このとき抜けてしまったイタリアへの直輸出反対派の人たちは百七人。もともと二百四十七人の社員がいたのですが、勸業会社の農家は大幅に減ってしまい、島村勸業会社は分裂してしまったのです。

弥平は、百四十人へと減ってしまった勸業会社の社員をまとめ、新しく規制を制定して会社を立て直しました。

明治十四年（一八八一年）、弥平は四回目の直輸出を行おうと計画しましたが、

「田島さん、我々三井物産はこの件から手を引かせてもらおう」

とうとう三井物産からの支援が得られなくなり、四回目の直輸出では当時のお金で七千六十六円、今のお金の額で約一億四千万円の損失を出してしまいました。

その後、明治十八年（一八八五年）頃までに、島村勸業会社の蚕種輸出は完全に途絶えてしまい、同社は解散してしまふことになりました。

6

このように、弥平のイタリア直売は経済的な成功には結びつきませんでした。弥平がイタリアに赴いたことで島村に、キリスト教や自由民権思想などの新たな思想を広めることになりました。こうした外国との交流を進めたことで、弥平はイタリアでの蚕病（蚕の病気）予防に顕微鏡が活用されていることを知り、これを取り入れて蚕病の予防に努めました。この、顕微鏡で蚕病の予防を始めたのは弥平が最初だったのです。今でも、弥平が蚕病の研究をしていた「顕微鏡室」が田島弥平旧宅に残っています。弥平はイタリアでの失敗を経験し、日本でいっそう島村の蚕種を広めることに決めました。

「どんなことがあっても、いい蚕種をつくるための努力を俺は続けるんだ」

島村勸業会社の解散後、島村では蚕種製造から繭生産を行う農家が増えましたが、弥平自身は蚕種製造や蚕種販売を継続し、島村の蚕種業と養蚕業はますます盛んになりました。島村には、見渡す限りの広い桑園ができました。

明治十八年、弥平は農商務卿であつた西郷従道より、功労賞を授与されました。そして明治二十五年（一八九二年）には緑綬褒章（りよくじゅほうしょう）長年に渡り社会に貢献し、素晴らしい実績を上げた人へ送られる賞）を与えられました。イタリア直売や、島村勸業会社等、苦しいこともたくさんありましたが「実業に勉励（べんれい）し、長きに亘（わた）って養蚕、蚕種に尽瘁（じんすい）した功績」として、弥平の長年の努力と、諦めない心が報われたのでした。

おわりに

弥平はこのように、群馬県島村から新しい養蚕技法を確立し、それを広め、また日本の蚕業を大きく発展させた人でした。彼の考え方は、彼が書いた本である『養蚕新論』『続養蚕新論』の中に残っています。この本は弥平が亡くなった後にも、養蚕を営む人の本としてベストセラーになりました。

後世の人は彼のことを、「群馬県の誇り」「蚕糸群馬が生んだ最大の巨人」と称し、その功績をたたえています。

四ツ葉学園地域歴史研究会について

県内各地から通っている四ツ葉生のうち、歴史や地元に興味のある人が集まって活動しているもので、住む場所、好きな時代、好きな国やその歴史、お気に入りへの偉人は皆それぞれです。

それゆえ、活動の幅は無限大です。そんな四ツ葉学園地域歴史研究会、通称「歴研」は、「歴史研究と通して高校生らしいアクティブな活動で、地元に変革を起こそう。」を活動理念としています。歴史への堅苦しいイメージや、若者と歴史との間に距離がある現状を打破すべく、歴研を中心とする歴史の伝承システムの確立を目指し、日々活動しています。

田島弥平 —お蚕さまと歩んだ軌跡—

発行者—四ツ葉学園地域歴史研究会

著作者—野口遥菜

2023年1月発行